



浜松医療センターにおけるメディカルバースセンター3年間の歩み

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 静岡県母性衛生学会 公開日: 2023-03-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 新田, 京子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10271/00004321

浜松医療センターにおけるメディカルバースセンター3年間の歩み

浜松医療センターメディカルバースセンター副看護長
新田 京子

1. はじめに

メディカルバースセンター（以下バースセンター、通称“めばえ”）は2009年4月1日に開設した助産師主導型の施設である。妊娠経過中に医師がローリスクと判断し、妊婦の希望があればバースセンター助産師外来で健診し分娩を行う。妊婦健診は医師とのチーム健診という形をとり、周産期センター（MFICU・NICU）内に設置されているので医療介入が必要な場合も迅速な対応が出来るのも特色の一つである。開設後から稼働した母乳外来も年々受診者数も増え、産後までの継続ケアも充実しつつある。

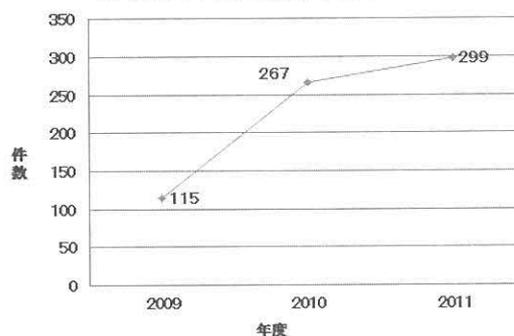
妊婦健診のシステム

週次	10~11週	12~15週	18~19週	20~23週	24~25週	26~27週	28~29週	30~31週
医師	*	*	*	*			*	
助産師	○	○	○	○	●	●	○	●

週次	32~33週	34~36週	36週	37週	38週	39週	40週	41週以降
医師	*			*			*	*
助産師	○	●	●	○	●	●	○	○

★は医師の健診 ●は2号館5階バースセンターでの助産師健診
○は3号館2階産科外来で必要時、助産師により保健指導をします。

母乳外来実施件数



開設から2011年3月31日の3年間にバースセンターで分娩を行った症例に対して安全に妊娠、分娩、産褥が終了できたか、次の3点について検証した。(1)バースセンターで分娩予約をしたがハイリスクと判断され周産期センターでの分娩となった症例の解析 (2)バースセンターで分娩となった症例の周産期事象（分娩方式、会陰裂傷や切開、出血量、児のAPGARスコア）(3)当院周産期センターでの分娩との比較

2. 結果

(1)バースセンターで分娩予約したが、ハイリスクと判断され周産期センターでの分娩となった症例：

当院における3年間の総分娩数は3444例、そのうちバースセンターを予約したのは909例（26.4%）であった。909例中妊娠37週の医師の妊婦健診におけるローリスク判定までに逸脱したのは60例（6.6%）、妊娠40週の医師のローリスク判定で逸脱したのは46例（5.0%）分娩経過中に逸脱したのは41例（4.5%）であった。妊娠37週以前の逸脱60例の理由は、FGR20例（33.3%）、PIH10例（16.6%）、切迫早産7例（11.6%）であった。筋腫合併も2例あった。分娩経過中の逸脱41例の理由は発熱・感染11例（26.8%）、NRFS10例（24.3%）、早期産5例（12.1%）であった。

(2)バースセンターで分娩となった症例の周産期事象

3年間におけるバースセンターでの分娩数は755例、当院総分娩数の21.9%であった。分娩様式は正常分娩743例（98.4%）、異常分娩12例（1.59%）であった。会陰裂傷や切開の割合は、無裂傷またはⅠ度が32.3%、Ⅱ度55.2%、切開11.9%であった。分娩時平均出血量は610.9ml、出血1000ml以上が114例（15.1%）であった。アプガールスコア1分値が7点以下は27例（3.6%）、5分値7点以下は6

例 (0.8%) であった。

(3) 当院周産期センター分娩 (23年度) との比較

当院周産期センター分娩と比較した結果、1000ml以上の出血は周産期センター分娩の方が多く、有意差も認められた。周産期センター内での会陰裂傷、切開の割合を平成18年度の成績と比較すると、18年度の裂傷なしは6.4%、I度は4.9%であったが平成23年度は裂傷なし10.1%、I度は13.4%でありバースセンターが開設したことで変化も見られた。

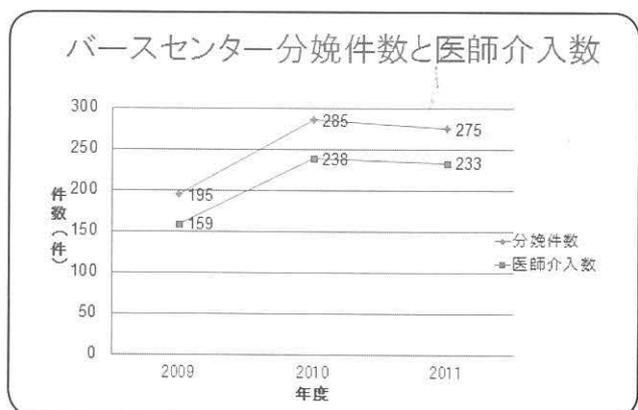
バースセンターと周産期センターでの分娩様式の比較

	2009年度	2010年度	2011年度	合計
正常分娩	191	278	274	743
吸引分娩	2	7	1	10
鉗子分娩	1	0	0	1
帝王切開	1	0	0	1
合計	195	285	275	755

異常分娩12例/755例 (1.59%)

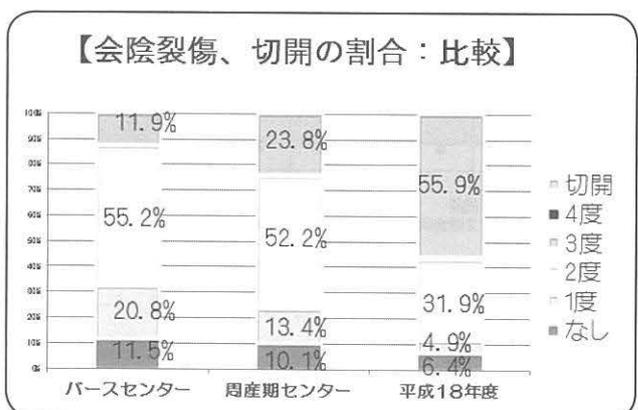
同期間、周産期センターでの分娩内訳

正常分娩	2099例(78.02%)
吸引鉗子	48例(1.78%)
予定帝切	348例(12.94%)
緊急帝切	195例(7.25%)
合計	2690例



バースセンターと周産期センターの分娩結果比較

	バースセンター (経陰分娩 755例)	周産期センター (平成23年度、 経陰分娩：694例)	P値
平均出血量(ml)	610.9	664.5	P=0.02
出血500ml未満	390(51.6%)	285(41.1%)	P<0.01
500-1000ml	251(33.2%)	304(43.8%)	P<0.01
1000ml以上	114(15.0%)	105(15.1%)	P=0.98
AP7以下 1分	27(3.5%)	57(8.2%)	P<0.01
AP7以下 5分	6(0.7%)	11(1.6%)	P=0.16
促進薬の使用	122(16.1%)	177(25.5%)	P<0.01



3. 考察

バースセンターでの急速遂娩は少なく、分娩時出血量、児のアプガールスコアからも安全に分娩が行われていることがわかった。また、会陰裂傷の有無の結果からもバースセンターができたことで周産期センター全体が助産技術を高めたいという意識の向上にもつながった。課題としては、①妊娠40週の判定で逸脱し予定日超過となった事例に対する助産指導の在り方を見直す必要がある、②分娩前後医療介入が必要な例が全体の3分の2であるため、助産技術、診断力の研鑽が必要である③逸脱の原因が筋腫合併など不適切な症例もあった。医師、助産師の入れ替わりが多く、周産期センタースタッフ全員にバースセンターのシステムを理解してもらうためには時間とコミュニケーションが必要である、という点が挙げられる。

4. まとめ

経過良好であれば、最大7回が助産外来での妊婦健診となり、医師の外来負担軽減につながる。安全、安心な医療、助産の提供が続けていけるようにスタッフ各々の自己研鑽とともに院内教育を充実させる必要がある。周産期のあらゆる場面に対応できる助産師育成をめざし、院内のキャリアラダーを構築するとともに、今後、開業助産師を受け入れる助産師オープンシステムも検討していきたい。